

## ほんものの医者

正月休みに炬燵で久世光彦の「死のある風景」というエッセイを読んでいたら、作家で演出家でもある久世氏は、俳優が演じなければならぬ役の中でいちばん難しいのは医者の役だと思うと書いている。どんな職業でも長年やっているうちに顔つきや歩き方、眼の配り、話し方などの日常の動作が決まって来て、そこにいくら俳優がそれらしくやっても敵わない「年月を経た日常」が現れてくるもので、俳優や演出家が付きつきりその動作を観察しても真似の出来ない「らしさ」がある。そして医者の場合、ご本人達もおそらく気が付いていない「らしさ」は、彼らがすべての人の背景に常に「灰色の死」を見ている、その「眼」から来るのではないかというのである。

いやアそんな風に鋭く喝破されてみると、こうして炬燵でだらりと伸びていていいのかと思わず居すまいを正したけれど、これはちよつと大袈裟、穿ち過ぎではないかという気もする。「死すべき者」の運命と「生かされている者」の苦渋を、患者と連帯し、共感する日常というのは確かにこの因果な職業の特徴ではあるけれど、それが医者だけかということそんなことはあるまい、坊主でも看護婦でも、あるいは警官でもおなじことではないだろうか。ま、ともかくここで久世氏が言いたいのは経験を積んだ職能人の「らしさ、つまり「風格」というものは俳優の演技では表現しきれないものがあるということであって、なにも医者がエライといっているのではあるまい。ただ映画の中の 医者らしい医者 の実例が挙げられているのがとても興味深かった。

久世氏は「幸福の黄色いハンカチ」という映画で炭鉱の診療所の医者を演じた俳優があまりうまいのでびっくりしたという。「仕草がちつとも目立たず、ボソボソ相手の顔を見ないで、必要なことだけを喋るのが、どこからどう見ても医師にしか見えない。こんな俳優がいたのかと調べてみたら、実は俳優ではなく、診療所のほんものの先生だった。けれど、ほんとう過ぎて、おなじシーンに出ている俳優たちとの間に妙なズレがある」と続いている。

これは面白い、かねがね映画やテレビドラマに登場する医者があんまり嘘っぽいのにうんざりして近頃では何も期待してないが、この際、プロの演出家が感服する程の「どこからどう見ても医者としか見えない医者」というのがどんなものなのかを是非見てみたいと思った。「ほんとう過ぎる」とはこういうことだろうか。

実はこの映画、入場券を買って観た記憶がないのにスジをよく覚えている。気に入っているのだ。だからテレビでは二度も観たし、大船撮影所跡に出来たシネマワールドが経営不振で閉鎖になるという直前、慌てて閉門まぎわに見物に行き、記念に買って封を切らなままのビデオも持っている。

シネマワールドの展示や仕掛けは納涼お化け屋敷みたいにチャチで安っぽく、これでは誰も二度と来る気にはならないだろうし、一年もたないで潰れるのも当然だと呆れてしまったが、「幸福の黄色いハンカチ」の撮影に使ったという炭鉱住宅のセットには、そんなも

のがここにあるとは思わないから、やや感興が湧いた。どうせセットだからチャチではあるが、チャチなりに一応「ほんもの」である。こんな安っぽいものが映画に撮られるとそれらしく見えるのが不思議であった。ビデオを記念に買ったのも他に買うものが無かったからではあるが、この思いがけない感興のせいが少しある。

武田鉄矢が熱演する、さかりのついた犬みたいな若い男と、駅前で彼につかまった桃井かおりの二人が物語の運び役で、鉄矢のボロ車で網走から出所したばかりの寡黙で、真面目で、逡巡ばかりしている高倉健がなんとか夕張まで送り届けられ、健さんに離縁されながら炭鉱住宅で長年刑期満了を待ち続けていた倍賞千恵子に迎えられるというスジは、原作がピート・ハミルだから仕方がないが、いかにもバタクさい。しかし、初夏の北海道の薫風に吹かれて広い空の下を、三人三様の想いが貧しい炭鉱住宅での歓喜の爆発めがけて疾走する設定は、若き山田洋次らしく、翻案大成功でちつとも無理を感じさせず、実に楽しい。クライマックスで炭住の物干し竿にヘンボンと翻る無数の黄色いハンカチにはやっぱり泣かされてしまうが、いわれてみても医者が出てくる場面があったかどうかとなると、まるで覚えていない。四人がみんな名演で存在感があり、みんなが主役みたいな気がする。かくてはならじと早速ビデオを視てみた。

なるほど、裾長の白衣を着た診療所の先生とずっしり肥えた看護婦が、健さんの子を流産してしまった倍賞千恵子をいたわりながら、五年前にも前夫の子を流産したことを聞き出している。観客の方は力無く横臥してためらいがちに答える千恵子と、隠し事を嫌う一本気な健さんのそれを聞いて膨れ上がった怒気に気を取られているから、初老の医者が見じみと「このたびは残念なことでしたなあ」と二人を慰めるのもまったく耳に留まらない。夫婦の悲哀に集中しているこちらの気持ちを掻き乱すような不自然な「演技のようなもの」は確かにここにはない。そうか、これかと思う。四人がひとつの画面の中にいる、時間にすれば数十秒のこのシーンを後で思い出そうとすると、医者と看護婦のあたりだけがなぜかモノトーン、灰色であったかのような気がする。ほんものと俳優の演技の間の「妙なズレ」というのが良く解らないが、あるいはこれをいうのかもしれない。

ところでこの看護婦さんもまた、そのどっしりとした押し出しといい、たった一言の科白の言い回しといい、医者にも増してほんものに違いない雰囲気である。教室から派遣されて赴いた病院や診療所にはたいていこんな感じの婦長さんが居た。駆け出しの頃、くちばしの黄色いやブ医者をさりげなく教育してくれたベテラン看護婦さんや婦長さんたちを懐かしく思い出した。お世話になりました。有難う。

この映画は脚本が良くて監督に才能があり、演ずる俳優たちが見事にひとつの世界を創り出していた名作のひとつだと思う。こういう名画を鑑賞しながら、一方で場面ごとに演技の深浅を測っている演出家の「眼」も凄いが、しかし、それでは「名作」そのものを素直に楽しめていないのではないかと気の毒な気もする。